「馬町空襲」忘れないで

長岡京市・溝口 宏(無職・81)

一月十六日が巡ってきた。といっても知らない人が多い。忘れている人もある。一九四五(昭和二十)年のこの日、京都市東山の馬町一帯が、米軍機の爆弾で修羅場と化した。死者三十五人、重軽傷五十四人、被害家屋三百十六戸を数えた。京都で初の空襲だ。

三十五年前に京都空襲を記録する会と京都府立総合資料館が編集した「かくされていた空襲―京都空襲の体験と記録」が刊行され、府内の被災記録の全ぼうが明らかとなった。肉親を失われたTさんは、悲しみを胸に九十路を歩んでおられる。

彼女には戦後はない。舞鶴には鎮魂碑、長岡京市には平和記念碑が建立された。空襲はその後、西陣でもあり、多くの死者が出た。二〇〇五年八月には、西陣の辰巳公園に記念碑ができた。馬町にも何か後世に残るものができないかと、願っている。

戦争の惨禍が私たちの身近にあったことや、戦争の恐ろしさを後世に伝えなければならないと思う。新しい年になっても、中東の火種は大きくなるばかりだ。子どもたちの犠牲に胸が痛む。私はどうすればいいのか…。一月十六日に馬町空襲のあったことを忘れないでほしい。

1月16日は私の平和の日

長岡京市・溝口 宏(無職・64)

'92.1.25

一月十六日は、先の大戦で東山の馬町あたりが空襲を受けた日である。死者三百五人、負傷者五百六十一人、被害家屋七百五十六戸と、「かくされていた空襲」に記録されている。

この惨禍も四十七年の時の流れは、忘却のかなたに追いやろうとしている。二十年前に京都空襲を記録する会に参加して、府内一円の空襲の実態を調査した私にとっては、忘れ難き日の一日である。平和の原点となっている。

家族を失った知人の心中に思いをはせる時、私の胸は痛む。この老女の戦後は終わっていない。

私が戦争体験の語り継ぎに、かたくなにこだわるのは、学徒動員中、学友を失ったからである。障害者となった学友があるからである。九死に一生を得た私が、ライフワークとして取り組むことは、当然の責務である。世界の人類が平和でありますようにと、すべての人が願いながら、いまだに戦火の絶えぬ現実は、どうなっているのであろうか。

先日、京女の小松寮のあった馬町あたりを、往時をしのびながら歩いたばかりだった。救世主は何か、だれか。一月十六日は平和を考える日、いや行ずる日としたい。

京都の戦跡を石碑で後世に

長岡京市・溝口 宏(無職・80)

H19.7.21

先日、長岡京市など主催の「平和を考える市民フォーラム'07」が、JR長岡京駅東口の平和記念碑前で行われた。

太平洋戦争末期の昭和二十年七月十九日、国鉄神足駅(現長岡京駅)周辺は米軍の機銃掃射を受けた。一人の少女の命が奪われた。市は、この悲劇を繰り返さないために七月十九日を「平和の日」と定め、毎年この日の前後にフォーラムを行っている。

フォーラムでは献花式などがあり、園児らが千羽鶴を献納。同市天神二丁目の戦没者追悼の碑にも献花が行われた。

駅近くの民間会社には十数発の弾痕のあった煙突の基部が残され、「祷りの碑」と命名されているが、神足空襲を調査した者として感慨深い。

私は最近、西陣、東山、伏見の戦跡巡りに参加し、戦争と平和について考えさせられた。京都市内は、石碑や立て札などが随所に目に付く。私たちの身近な京都にも戦争の恐ろしさがあったことを、石碑を通して後世に伝えたいものだ。